

弔詩

久保孝雄

南村志郎に捧げる

南村よ まだ逝くのは早すぎたよ
「メシでも食いながらゆっくり話したい」
と言ってきたのは君からだった
まだ実現しないうちに逝ってしまうなんて早すぎるよ
話し相手を失って なんとも淋しく 空しい
心にぼっかり穴が空いてしまった

思えば長い付き合いだった
初めて会ったのは上井草
空襲で焼け出された東京外語の仮校舎
畑の中の粗末な木造校舎
冷暖房もなく吹きっさらしのバラックだった

宿舎と言えば中野・上高田の日新学寮
ここも貧民窟のような建物
食堂はスイトンがご馳走だった
みんないつも腹ペコだった

だが毎晩のように これからどう生きるか
日本をどうするか と言った大きな話に
世の更けるまで熱をあげたっけ

やがて政治の逆コース、反動化が進んで市民のデモやストが起きた
学費値上げに反対する学生運動も盛り上がった
学生運動といういつも中国語とロシア語の学生が先頭に立った
その先頭にいたのが南村だ
君は外語を代表して都学連に出た
小さな学校なのに東京外語は、東大、教育大（今の筑波大）と並んで
都学連の御三家と言われた
そして君は退学処分を受けてしまった

それぞれ進んだ道は違ったが 中国への想いは変わらなかった
日中友好に捧げた君の生涯は見事だった
日中国交回復に果たした君の功績は永久不朽だ

僕も県庁時代遼寧省との友好提携を実現し
神奈川県日中友好協会の会長を十年勤め
学生時代からの夢を追い続けた

学生時代 世界の最貧国の一つだった中国は
今や米国と並ぶ大国だ
米国を追い越す日も視野に入ってきた
台頭するグローバルサウスのリーダーとして
世界秩序を変えつつある

南村よ もうすぐなんだ
中国が世界をリードする日はもう直ぐなんだ
それを見て欲しかった 一緒に祝いたかった
だからいま逝ってしまうのは 少し早すぎるんだ

だが僕もそれが見られるかどうかわからない
だがなんとしてもこの目で見て
僕がそちらに行った時 南村に詳しく報告したい
その日までしばらく待っていてくれ

(2024年3月23日)